

# Steel Land scape.

## 〈捕える鉄～高知〉

商業捕鯨における最大のテーマは、いかに鯨に苦痛を与えないか、であった。そのための工夫が、モリには秘められている。モリの生産地であり、捕鯨の拠点でもあった高知県にスポットをあてる。



室津港を出港した捕鯨船は、この室戸岬を通過して大海を目指した

### 戦後日本の窮乏した食卓を賄った鯨

すぐれた随筆を数多く残したことで知られる物理学者の故・寺田寅彦氏は、昭和9年に執筆した「初旅」という作品の中で、こう記している。「父は維新前所謂御鯨方の支配の下に行はれた捕鯨の壮観と、大漁後のバッカスの饗宴と

を度々目撃し経験していた……」。その勇壮な光景を幼いときから聞かされて育った寺田氏が、生まれてはじめての旅に出、鯨魚を見ようと、大きな期待とともに高知県室津の港を訪れる。しかし、そのとき残念ながら漁は行なわれておらず、そのためにかえって父親から聞かされてきた鯨

漁の勇壮な光景が、鮮明な残像となって記憶の中に保存されることとなった……。彼の父親の郷里は高知。そして、彼自身も高知で育った。彼が訪れた室津港は室戸岬にほど近く、鯨漁の拠点として栄えていた。

今となっては昔、すでに商業捕鯨が行なわれなくなってから久しい。捕鯨の是非が世界中で熱く論議され、食文化、動物愛護、食料資源の保護など、さまざまな見地から討論が交わされた。いずれにしても鯨と日本人との関わりは深く長いものであった。「古事記」には、神武天皇作のイサナ（鯨）捕りの歌もある。古来、鯨は私たちの暮らしの中でさまざまな形で貢献しつづけてきた。口紅や香水、衣料品の材料、楽器、釣竿……。食用としても貴重だった。とくに戦後日本の強烈な食料難を救ったのは鯨だといって過言ではない。それまでは特定の地域でしか消費されていなかった鯨肉が全国に出回りはじめたのは戦後のこと。肉全体に占める鯨肉の割合は、一時は40%にまで上昇した。「嫁にやるなら捕鯨船乗りに」といわれた時代。捕鯨業は花形産業だった。そして、この室津の港もまた、日本の窮乏した食卓を支える捕鯨の拠点として、繁栄を見せていたのだ。



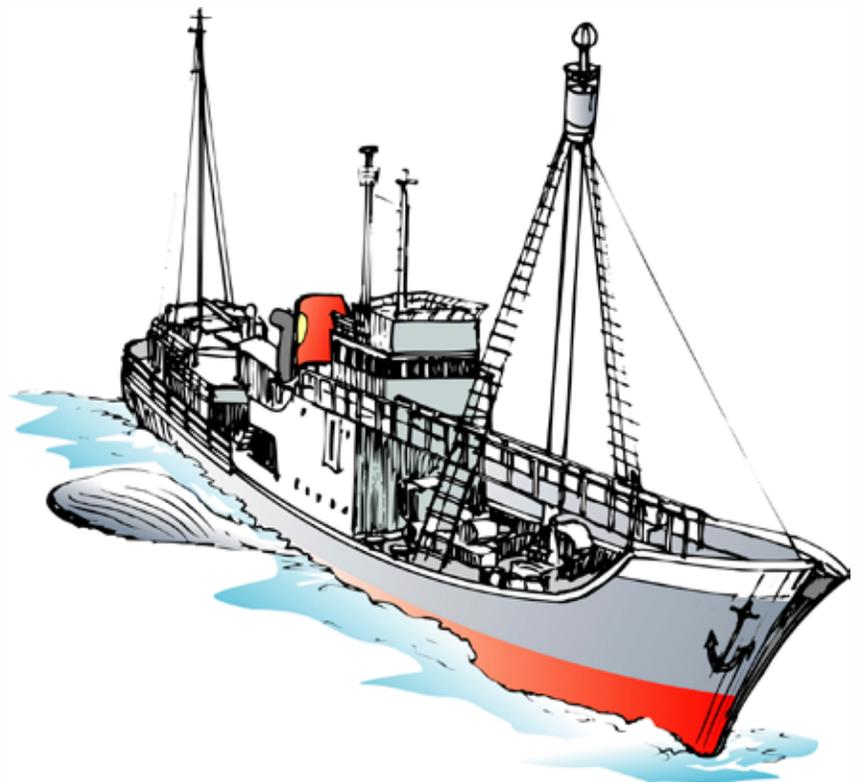
高知市の名物、日曜市の様子

### モリに見られる近代捕鯨の姿

高知県にはもともと刀鍛冶や鎌、包丁などで知られる土佐打刃物があるが、捕鯨に使用される捕鯨砲の砲身やモリも、ここで生産されていた。さしたるものとも思えない道具が巨大なものを打ち負かす例えに「鯨に鉋」という諺がある。しかし、近代的な捕鯨におけるモリは、それ自体強力なものだ。

モリも時代とともに姿形を変えてきたが、もっとも近代的なものは、船首に取り付けられた捕鯨砲から発射されるもの。鯨体に打ち込まれるとモリの先端が破裂し、鯨を殺傷する。モリの先端部分は鋳鉄で9kgほどの重さ、内部に空洞があって、そこに火薬が仕込まれる。円錐の先を切断したような平頭形をしており、この形がもっとも実績が良かったのだという。また、この先端部分以外の部分は鋳鋼鍛造で、185cmほどの長さであった。一度使用したものは、取り出して形を整え、何度でもリサイクルした。

内部に火薬を仕込む方法を探る以前にも、さまざまな試みがなされていた。電気や薬品を使用するもの、高速弾、炭酸ガス弾……。これらはすべて「鯨に苦痛を与えない捕鯨」という大きなテーマに向けて研究されたものだった。



モリ一本で仕留め、余計な苦痛を鯨に与えない。その成否は、捕鯨砲手たちの腕にかかっていた。彼らは「てっぽうさん」と呼ばれ、捕鯨船の上でもっとも重要な役割を担っていた。彼らは吹き荒ぶ冷たい風雨の中、船首に立って捕鯨砲を構える。砲の射程距離はおおむね70m前後、しかし命中率を高めるためにできる限り近くに寄らなければならない。てっぽうさんは、このとき全船を指揮する。研ぎ澄まされた反射神経と集中力が不可欠だ。自らの腕に、多くの人々の生活がかかっているのだから。

ハーマン・メルヴィルの原作をもとにしたジョン・ヒューズ監督の映画「白鯨」は1956年の作だ。ここには19世紀、捕鯨最盛期の様子が生き生きと模写されている。船上でモリを鍛造する様子、鯨を解体して油を採取する様子。「鯨一頭で何千という家庭の明りが点る」というセリフがある。また、「もし神がこの世に現れるとしたら、それは鯨の姿をしているだろう」という有名なセリフもある。鯨とい



かつての鯨取りを描いた絵図  
(提供：室戸市役所商工観光課)



いまでは主に包丁の生産で知られる土佐打刃物

う巨大な生き物に対する畏敬の念と、捕鯨が人々の暮らしを助けるものだという自負は、東西を問わず、捕鯨に関わる人々に共通の気持ちだったのかも知れない。

寺田寅彦氏は、ついに父親の時代の旧き良き捕鯨を目の当たりにすることなく、この世を去った。私たちも、もう捕鯨の光景を目撃することはないだろう。商業捕鯨の是非は別として、寺田氏の記したように「自分が父から聞いたような美しい勇ましい夢物語は矢張永久の夢物語になってしまった」のだ。